

小集団のなかで

ことばの機能をどう伸ばすか

柳原悦子

幼児のことばと遊びの記録をとってみると、独りごとから話し合

いに移行しているが、幼稚園では、いつも自然に独りごとから話し合えるようになるのを手をこまぬいて待っているわけにいかない。

積極的に友だち同志結びつくよう努力させることが必要である。では、

「話し合いを育てるために幼児は、どうしなければならぬか」。

「よせて」「いれて」がいえなくてきわぎのおこることが多い。

「そうだん」がじっくりできるようになるのも年長組の五月頃からであるが、交代「かわりばんこ」ということが身につけて使えるようになり、「よせて」といえる、入れてもらって一しょに遊ぶうやう遊ぶか、と相談をし、いろいろの方法を作り出してこそ、友だち同志が一つの目的に結びつき、よく遊べるようになる

のである。

三年保育では「代わりばんこ」とか「順番」をきめるのに、ジャンケンポンがなかなかむずかしい。勝つべきつもりのもが次には負ける。その組み合わせの変化が覚えられないが歌なら歌えるし、簡単なりズムなら取れる。そこで九月早々に鬼ごっこをする時などに「ゾーリカークシカクレンポー」と歌を教え、最後の「チュッ チュッ チュッ」で人を決定し、それに当たったものが鬼やお当番や先頭になることを指導した。歌がなんとなくコッケイなので、皆が大喜びで声を揃えてやりだした。

事例 十月六日 三年保育児 女子4 男子3

H子のズックの裏に押ピンがたった。H子「あっ ズックの

裏に釘がたったあ」

K、M「どこ」「どこ」「H、Y一斉にのぞきこむ。K「みせて」

Y「ぼくがとっちゃわあ(取ってあげる)」H「だしてごらん」
ひっぱりあいとなる。H子「うちのだわねえ」(私のだよ)と
べそをかきだした。

M子「ゾウリカークシできめるだわねえ」皆がそうだと気が
ついて両方からひっぱり合いをしていたK、Hがすわり、ズッ
クはしっかりとKがお腹に抱えている。

残りのY、M、M子、H子、声を揃えて

「ゾウリカークシ、カクレンボ、ハシノシタノネーズミがゾ
ウリクワエテ チュチュチュ」とやったが、出発が4本の手
で、それぞれ勝手に歌に合わせて二人の頭を押さえてやってい
るので、最後に、どちらの頭にも決定の手がのっている。

皆困って当惑して顔を見合わせている。

教師「決める人はひとりで、歌を皆でうたおう」

M「そうだ。ズックはまん中に おいておかんどいけんよ」K
はびっくりして腹にしっかり抱えていたズックをすなおに中央
におく。そしてMの手に皆の音が揃って初めからやりなおし。

H君に決定。H君は一生懸命押ピンを抜いてやる。H君は手を
洗いにいきM子、Y「おもしろかったねえ」と走り去る。

教師にうながされてH子あわてて「ありがとうっ」という。

事例 九月十八日 二年保育年長児が主体で園庭で。

年少児も少し含む

自転車の後輪に出ている補助輪がぐうぜん、プールに行く飛
び石の間にビッターとはまって、前にも後にも動かなくなり、
そこに安定してしまった。押ししたり、ひっぱったりしてわいわ
いさわいでいるうちに、力のあるのが一生懸命にペダルをふみ
出し、他の子どもは補助輪をはずそうと、両側の砂をかき出し
た。すると両側からかき出した砂が中央の後輪の所にたまり、
それをペダルでこぎだしたのですごい勢で砂が吹き出した。

「ビャー」「ウワァー」と歓声をあげて喜んだ。

そしてよく見ると後方へ吹き出す砂が、じょじょに細まり吹
き出が少なくなる。

もう一度やってみようとやりだす。砂が少なくなると、また
砂を盛る。

そのうち友だちが周囲から集まってきて、ペダルをふむこと
を代わりばんこにしました。それは背の順に並んで、背の高い
ものからふむ。

待っている間は砂をよせ、半円になって手を伸ばし砂のあた
りの強弱を調べている。そしてその手に砂のあたりが弱くな
り、半円が小さくなると、次の子がペダルをふむ という方法
を取っていた。砂で手は真っ白になったけれど、立派な「代わ

りばんこ」の方法が時間をかけずぐにできあがっていった。

交代ということばを知っていても、全部の幼児がはじめからその意味をつかんでいるとは限らない。「よせて」「代わりばんこ」ということばの説明だけでなく、毎日の遊びの時、いっしょに遊ぶ時のあいさつ、ルール、交代などの経験を積み上げ、よせて」「代わりばんこ」という概念が幼児の頭にできはじめて使えるようになるのである。そしてその必要のことばも甘えた言い方や、弱々しい言い方では用をなさない。はっきりと言えてこそ相手の言い分も聞き、自分の主張も言うという本当の話し合いが可能になってくるのである。

グループの構成とことばの関係

いっぼう遊びが組織化されたり深くなると、表現のことば数が少なくなるようである。が、その場合ことばそのものはどうなのであるか。記録からことばを比較してみるために、記録のことばを次のように分類してみた。

分析方法

幼児のことばを分析したピアジェの研究の中の考え方の一部を使い、分析基準とし、次の目的から選び出す（静大付幼研究を

資料とす）

分析の目的

・話し合いの中にどの程度の自己中心なことばが含まれているか。

・どの程度ならば互いに話し合えるものか。

・幼児の中のだれが能動的でだれが受動的であるか。

分類項目

(1) 独語 ことばの繰り返し

自分自身に話す独りごと

仲間のいることがことばの誘因にはなっているが、聞き手を意識しないで、しゃべる集団的な独りごとである。

(2) 社会的なことば

(イ) 話しかける相手ははっきりとわかっている、話し合いにならなかったもの、つまり一方的な話しかけのことばである。

(ロ) 互いに話し合ったことば

能動的な発言と受動的な発言とに分けて分析した。

(ハ) 他グループへの働きかけ

(ニ) 教師への働きかけ

分析する観点として

発言の回数は、幼児のことばを、文を単位として分析した。

「うん、そう」とうなずく短いのも相当に長いのも含む。ひとりの発言でも、内容が二つにわたっていると思われるものは、

二回とした。

A表について

自由遊びの中で各学校とも遊びが同質という内容は少なく、その記録はむづかしいが、物をつくるといった場合は、場が限定されているので記録しやすい。そして記録の時間がきりやすい。共に何か材料を使い、グループで何かを作るといった共通点も見出される。そういった理由から二年保育年少組粘土、一年保育積木、二年保育年長組砂場の記録を取ることにする。

回数	項目 組別	① 独 語	② ば 社会的な こと	グループ内		グループ外		グループの人数
				(f) 話しかけて 返事のなか ら	(g) 互に話し合 ったことば	(h) 他グループ へ働きかけ たことば	(i) ば かけたこと ば	
第一回目	二年少保育組	33%	67%	3%	6.4%			男女 22
	一年保育	17.9%	83%	67%	14%		2%	男女 22
	二年長保育組	19.5%	80.4%	28.7%	37.9%	6.2%	6.2%	男女 22
第二回目	二年少保育組	11%	89%	25%	60%		5%	男女 45
	一年保育	17.2%	82.8%	28%	60%			男女 92
	二年長保育組	11.2%	88.9%	5.2%	63.4%	10.5%	9.8%	男女 75

B表

遊び	①	②	(f)	(g)	(h)	(i)	人数
(第一回) 戦争ごっこ	56.7%	43.3%	30%	13.3%			男 9
(第二回) 少年ジェット	21.8%	78.2%	36.7%	36.7%	1.2%		男 10

B表について

時期 第一回 五月二十日—六月五日
第二回 十月五日—十月二十日
時間 三十分、人数 第一回と第二回とはだいたい同じ。
一番記録の取りにくい遊びの戦争ごっこ、少年ジェットごっこを調べてみた。これは行動分野が広く、こうした遊びの中でこのことはどうか。遊びの内容はどうか。第一回と第二回でどう違うか、記録をとってみる。

時期 A表と同じ 時間 二五分

B表に対することばの内容

○五月十八日 戦争ごっこ 一年保育

A「ビービー」教机の下から、

S「中村としゆきさんビービー」

机のかけからマイクのままね。

N「りようかい。りようかい。ドカンドカン」

床をはっていく。

以下略

ここより鉄砲のようなものが加わり粘土の玉やボールが加わって「ばーんばーん」「ダーンダーン」「バクンバクン」と、戦争ごっこになり出す。N、S、を中心にして二つに分かれて(場所的に)いる

つもりだが、敵か味方かわからない。結局、目の前に来た者に（味方であっても）向かって鉄砲をうつ。はなしあいのごとはほとんどなく、終始一方的な話しかけか、独語に終わっている。

○少年ジェット(じつこ) 一年保育

M 「少年ジェットごっこするものこの指さわれ」

松組部屋の入口のあたりで何度も大声をあげる。

N、M、Tなどついてゆく。遊戯室の片すみに寄って

A 「少年ジェット、お前はだめだわ」Nに向かっていう。

N 「ほんならA君、一番背の低い人からだぞ」

T 「いんや、じゃんけんだぞ」

N 「早く、ほら、じゃんけんだよ」

N、A、M、T、m 「じゃんけんぼん、じゃんけんぼん」

T 「けいかんはAくん。ぼくもけいかん」

N 「お前どろぼーになれ」mにいう。

m 「うん」

A 「はやこと逃げんとー」 m、Tmに向かっていう。

n 「お前いいもんかや(Nに) ぼくは悪者かや」

N 「いんや、みんなけいさつだよ。いい者だぞ」

Tm、m 「ウワイ。ウワイ。ウワイ」

廊下の方に走って出る。

A 「あいつをやつけろ」 Tmやmを追って出る。

「ウワイ ウワイ ウワイ」

下駄箱の方で追っかけっこをしている。

A 「お前が、ぼーでヤーヤーとやると、みんなやられーで(やられるぞ)」悪者のmにさしず。

m 「うん、ヤーヤー。パン」とたんにN、T、Mなど倒れる。

そのすきに、m逃げだす。みんなたち上がって一斉にmをつかまえる。

N 「や、つかまえたぞー」

みんなふーふーいっているすきにmまた逃げ出す。

M 「こらー ウワイ」

N 「いい者だれだッ、少年ジェットが出んといけんぞ」(でなといけないよ)

T 「少年ジェットは、こうやってやーがね」

両手をひろげてとぶまね。

N 「うん こうしてな(とぶ)つかまえろー」

少年ジェットをはさんで皆でやることの相談をしている。

M 「あつ、つかまえた」mとうとうつかまる。

M 「あつ、mちゃん、ボタンがとれたよ」(心配そうに) スモックの白いボタンがとれたのをみている。

M 「これ ダイヤモンドにすーか」

T 「うん」と手にボタンをにぎっている。

m また逃げる。

N 「わんわんわん、けいさつ犬だぞ、もうはなさんぞ」

Tmをつかまえてくる。

T 「この宝物、持っているのにわからないのかー」

白いボタンを見せて逃げる。

N 「おい、犬のシロがくわえたぞー」と白いボタンを取る。

T 「隊長ほらー」ボタンをAに渡す。AからNまたT。投げて受けたりする。

K 「よしてー。よしてー、Nくんぼくもよせてー」

皆が走っていく後を追いかけている。

N 「じゃましたらいかん」

M 「よしてあげてもいいよ」

N 「いんや、足がのろくてなんにもならん」

H 「ぼくもよせてね」

N 「うん、またあした、よせてあげる。ワイイ、こらーっ」

追いかけて逃げる。みんな「バーン、バーン」下駄箱のかげにいるMやTmに向かって攻撃。

A 「やめろ、手じょうかけろ、はーはー（息をつく）つかまえろ、もう手じょうをはめたから動かないでー（よ）。ガチャン、足も手じょうをはめたけん、（はめたから）びよんびよんとは

んと。とんで飛げたあー、あっえいやー。もう死なしたで」
M 死んだまねをする。

遊びが終わり、かたづけになったので教師が聞いてみる。

教師 「いまの遊び、おもしろそうね、なにごっこ？」

N 「あれ、少年ジェットごっこだよ、はじめお遊戯室では、小豆沢くんがジェットだったけどね、つた谷君になったが」

教師 「なんで、つた谷君がジェットなの？」

N 「つた谷君がばんジェットに顔が似ちようけんだが」

教師 「いい者や、悪い者がいるの？」

N 「いい者がぼくたちで、悪者がね、松田君と田中君だったけど、田中君がさっきやめて岩井君になって、終り」

教師 「松田君ばかり悪者だけど、なぜなの？」

M 「足が早くて、追われてもつかまらないよ、ほかの人が悪者だとすぐつかまーが、おせいけんみんなつかまってだめだ。」

松田君は、早いよ」

一学期の戦争ごっここと比べると、大きく動き、友だちというものの役を、しっかりと握り、それぞれの能力を考えて遊びを構成している。そして組にこだわっていない。ワァー、ワァーと走りまわっている乱れた中に、ちゃんと遊びのおもしろさを組み込んでいる。敵・味方の力が相対していなければいけない、そうした

ことも自然に入っているし、必要なことは生き生きと使われている。が、自然に発生した粗野な遊びの原型であり、野放しにできない点も含んでいる。

記録から、このように数字で分析結果を出してみると、ふだん何となく発言の少ない子だと思っていた子や、グループの中心になつて遊び、話し合える子だと受け取っていた各々の子どもたちの、話し合いの実態がやや適確に把握できたことは、何よりの収穫であつた。

4才児では、社会的な通じ合ったことばの内容は「それかせて」「やだよ」といった種類のやりとりに関する話し合いや、粘土の作業とは関係のない話し合いが目立ち、作業はばらばらで終わっている。

一年保育では「これ、すべり台だよ」といっているのに返事をしないで、それでいて、すべり台として、他の友だちもすべって遊んでいる。

A「飛び込みだ、とんでみようや、ドボン」ととびこむ。

C「こうだよ」と、とびこむスタイルをする。こうしたことばに対して直接ことばで答えるというのが少ないが、遊びは比較まとまっている。そして二回目には、うんと話し合いらしくなつてきて、短時間でその開きがはっきりしている。

二年保育年長児は課題意識がぐっと強まり、砂場作業以外の話し合いは、ほとんどない。そして

「きのうの続きを」というように、作業そのものを、つぎつぎと積みあげている。ことばそのものは、一年保育や年少と比し、方言が少なくなっているのが目立つ。

グループの人数、男女差

上表の通りである

× × × ×

集団そのものをさぐり、ことばによつて、どう変化し、高まっていくか、

両者の相関関係を出してみたが、取りかかったのであるが、今回はそこまでいかず、まだまだ路は遠し継続研究中である。

(松江市立母衣幼稚園)

グループの質	2年保育年少	1年保育	2年保育年長
第一回	男 2 女 2	男 2 女 2	男 4 女 5
第二回	男 4 女 5	男 9 女 2	男 7 女 5

★
★
★
★